

TITLE

JAN.

タイ

定価 58

平成17年1月1日発行（毎月1回1日発行）第6巻第1号 平成17年11月24日

永遠の名作『サーキットの狼』を実車で再現!!

スーパーカーに 今でも夢中!!

現地徹底取材「カウンタックを作った4人の男」
現代に舞い戻った「フェラーリの女豹」加藤夏希

タイトル・ウォッチサロンへようこそ
市川海老蔵、「パリ」をゆく



book in book
30代からの
超合金



さかいとしひこ 1964年生まれ。高知県出身。デザインスタジオ勤務を経て'91年に渡米。翌年の帰国後サカイ・デザイン・アソシエイツ設立。インテリア、プロダクトなど多方面で活躍を続けている。'01年グッドデザイン賞(GHD-701)ほか。'04年「クッゲンハイム美術館展」では小誌とのコラボレーション・グッズを制作した。



「FinePix (prototype)」富士写真フイルムのデジタルカメラ「ファインピクス」シリーズのプロトタイプ('02年)。

Baptized Men of Super Cars 04

酒井俊彦さん プロダクトデザイナー

プロフェッショナルの目から見た
カウンタックの“あり得ない”デザイン

text: Takashi Koga/Jun e Co.
photograph: Raita Yamamoto

大きな言い方をすれば、カメラマンに見える色と、一般の人に見える色は異なる。プロフェッショナルには、プロフェッショナルなりの「見方」がある。プロダクトデザイナーである酒井氏には、やはりカウンタックが一般的な見方とは異なっているように見える。

「カウンタックのデザインは線で成り立っているモノじゃありません。線でもなければ、面でもない。立体物が組み合わさっているんです。ゲッターロボと一緒にですね。凹み、盛り上がり、線と面の繋ぎ、など構成として「あり得ない」と言ってもいいくらいなほどに無理があります。正直、部分的には美しいところがあるんですけど、全体的に見ると、凄くキレイに繋がっているんです。本当に感心させられるほど際どいバランスで成り立っていると思います」

「デザイナーが意図して生み出したもののなか、偶然の産物なののは我々に知るよしもない」

「彼のその後の作品を見ても、カウンタックのような神がかり的なものは作れていないので、たまたまの可能性はある(笑)」。かといって、カウンタックのデザインを否定しているのではない。

「根本的にあれば、あり得ない。構成は、作れと言われても僕にはできません。僕が持っている美的感覚とは違うんです。それなのに、僕にも美しく見えるんです」。酒井氏のカウンタック賛美は続いた。「ちょっと前に話題になった携帯電話やPCのデザインも、時間が経てば古さを感じさせます。でも

カウンタックのデザインはいつ見ても古くなりません。プロダクトとして非常に稀な存在でしよう」。

酒井氏も、幼少期にはスーパーカー・ショーに足を運んだ一人。「ドアが跳ね上がって開く、という光景が物凄く印象に残っています。小学校の頃でしようね、きっと。いつか欲しいとか、いつか乗りたいとか、そういう思いは一切ありませんでした。ただただカウンタックは「カッコイイ!」っていう思いだけでした。スバル360とか、ホンダバモスとか、いすゞ117クーペとか、時代が良かったのか、国産車もデザインは良かったですよ。もちろん、カウンタックは別格でしたけど」

プロダクトデザイナーという職業柄、現代のスーパーカーにも造形的には興味があるという氏。だがクルマである以上、毎日乗れるものが今の酒井氏のライフスタイルには合っているという。

「スーパーカーは、僕の日常生活において必要ありません。それだったらボルシェ・カイエンみたいに速くて、荷物がたくさん積めて、毎日乗れるSUVが欲しいです」。

スーパーカー世代でも、多くの人がスーパーカーを思い出として頭の片隅に置いているのが現実。

「スーパーカーを所有するよりも、僕はコンセプトカーで「スーパー乗用車」をデザインしてみたいんです。スーパーカーが、酒井氏をデザインの世界へと引きずり込んだ。そんな氏の創作意欲が、新たな衝撃を生み出すべく、今は乗用車に対して向けられている。